## 第１２章　伝道（主の喜びを分かち合う）　教会のメンバーに向けてのものです

この章のテーマ

１．福音は、存在の価値と永遠の命（本当の命）に関する事柄で、すべての人が分かち合われる必要のある大切な事柄であることを確認しましょう。
２．福音が分かち合われる時には、相手の人格を尊重する愛が必要であることを知ります。
３．伝道は、神様と教会と私のチームプレイであることを知りましょう。

【福音の重要性】

福音の重要性はどの位、高いものであると思われますか？

福音は、それを聞いて受け入れる人に何を与え、どのような変化を与え、それが世界をどの位変えることになるのでしょうか？

聖書にこのように書かれています。

「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ１：１６）

私たちが福音（Good News）を人々と分かち合う時、私たちは唯一無二の最高に価値あることをしているのです。

この重要性のゆえに、優しい心をもって福音を分かち合いましょう。

【伝道の定義／私の務めは】

伝道とは…

聖霊様のお導きによって、救い主イエスキリストをわかりやすく伝え、結果は神様に委ねることです。ですから、

伝道の主体は…聖霊なる神様です。

伝道の器は　…あなた（私）です。

伝道の動機は…愛です。

聖霊なる神様に用いられるように、また神様の愛が心に満たされるように祈りましょう。

自分の力ではなく、聖霊なる神様の器として大胆に用いられてゆきましょう。

【伝道のステップ】

誰でも、福音を知る必要があります。

福音とは何であったか？　もう一度、５課を確認してください。

伝道は次のようなステップで進んでゆきます。

1. 隣人との温かい人間関係を築きましょう

あなたの周りの隣人（家族、同僚、親友、知人）に温かい関心を持ちましょう。神様がその方を愛されているからです。

私たちは人を数や利益から見てはなりません。人を愛し、人に関心を持ちましょう。福音を分かち合うのに必要なのは優しい愛です。

2. 隣人のために祝福を祈りましょう

そしてその人たちの祝福のためにお祈りし続けましょう。

また、いつ、どこで、どのように、神様のご愛と福音をお分かちできるのか、聖霊の助けを祈り求めましょう。

3. 隣人とイエス様の愛や言葉をシェアーしましょう

聖霊なる神様に祈りながら注意していると。その方のためにどうあれば良いか、導かれることがあるかもしれません。例えば…

話を聴かせてもらいたいなぁ…。

キリスト教の小冊子や本を差し上げたいなぁ…。

友達や牧師を紹介したいなぁ…。

食事をいっしょにしたいなぁ…、などなど。

その人をイエス様にあって受け入れ愛しましょう。

→そしてイエス様の愛を分かち合いましょう！

4. 隣人を礼拝や諸集会に誘いましょう。

隣人が、さらに深くイエス様に出会えて、神様の愛を体験することができるように礼拝や諸集会に誘ってあげましょう。また、マイルーツを勧めてあげてください。

5. その方がイエスさまの弟子となるまで関わりましょう。

その方が、どのようにしたら神さまとの関係を親しく持つことができるようになるるのか？

どのように成長してゆくのか？　など伝えて共に歩んであげてください。

【伝道のポイント】

神様が私たちの隣人（家族、同僚、親友、知人）を愛し、その隣人も本当は神様を必要としているので私たちは福音を共に分かち合います。

これは神様の愛のわざですから、その人の人格を尊重することがとても大切です。

そのために、以下のことに気をつけましょう。

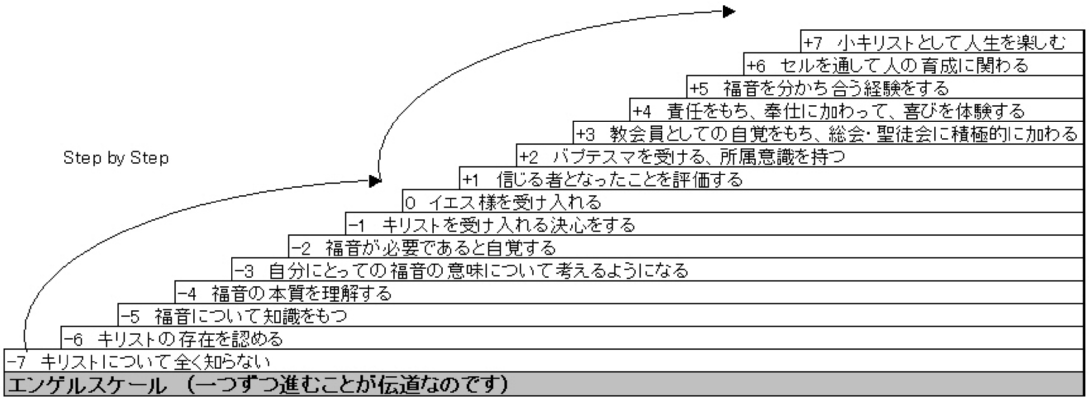
①議論や説得は避けましょう。その人を受け入れ、キリストの愛を現してください。

②分からない言葉は使わないようにしましょう。

③あなたの持ち味を生かしてイエス様のすばらしさをお伝えしてあげてください。
硬くならず自由に接してあげましょう。

④個人プレーではなく、チームで伝道しましょう。「チームで」というのは、例えば、もしその人が子育てについて悩んでおられて、あなたにその経験がない場合は、子育ての経験のある他の教会のメンバーをその人に紹介し、あなたは背後で祈り続けるというようなことです。
伝道は愛のわざなのですから。

【エンゲルスケール】




人はある日いきなりイエス様の弟子になるのではなく、そこに至るまでのプロセスがあります。

ある方はイエス様のことを聞いてすぐにイエス様を信じて受け入れるでしょうし、ある方には長い期間が必要です。

また、それぞれの段階で大事にされるアプローチがあるのです。

この図は、そのことを表にしたものでエンゲルスケールと呼ばれるものです。

この表は、既にイエス様に出会った私たちが、まだイエス様のことを良く知らない人たちの良い隣り人となってその方たちを良く理解し仕えるためにあります。